読売俳壇

矢島渚男 選

啓蟄や大地に戻す野菜屑　横浜市　沼宮内　薫

【評】普通ケイチツと言う句は何かが何処からか出てくるように作られるものだが、意表をついて土に戻すと言う。そこが面白い。しかも納得する。かつて土に埋めていたように循環させるのが正しいと。

頑なに継ぐ者無き田耕せり　宍粟市　宗平　圭司

【評】頑固に後継者のいない田圃を耕している。耕運機なんか使わないで、鍬を振り上げ世を嘆きつつ。

「貝おほひ」とどめし宮や若緑　東京都　吉村　恵子

【評】『貝おほひ』は芭蕉の最初の著作で二十九歳のとき故郷の伊賀上野の天神社に奉納して江戸へ出た。今は誰も読もうとしない一冊。

解けそむる蕾の襞へ春の雪　別府市　本藤　宣子

絵ろうそくに溶けゆく桜春彼岸　相模原市　サカシタマサキ

むささびの春風に乗り着地せり　東京都　関根ともみ

塩加減海女の子に聞き馬刀大漁　東京都　朝田　黒冬

花守に贔屓の一樹ありにけり　北本市　萩原　行博

病棟の八階にある遅日かな　神奈川県　中島やさか

梅の枝空へと花を放つかに　福生市　金子　六月

高野ムツオ 選

震災忌のたりのたりの海であれ　東京都　佐藤　勝美

【評】「震災忌」は関東大震災の季語。だが、こうした句と出合うと東日本大震災としても通用すると思わされてしまう。春の海を演出した元祖蕪村にもご意見を伺ってみたい。

残る鴨暗渠に入りて眠りけり　山梨県　一瀬　利彦

【評】病気や怪我などで残らざるを得ない鴨には湖沼の隅が似合うイメージがある。だが、ここでは都会、それも暗渠とは寂しさ倍増だ。

語らへば師系ひとつや梅の園　浜松市　野畑　明子

【評】「誰に学んだの」「その先生はどなた」と話を交わすうち同じ師系だったと気づく。まあ俳句はそれほど狭い世界。梅は詩歌の源流の花。

一羽飛べばみな飛ぶすずめ風光る　青森市　小山内豊彦

春霖や港へつづくなまこ壁　横浜市　鈴木　基之

しゃぼん玉マンドリンから弾け飛び　横浜市　石黒　敬彦

チューリップ隣同士で話すやう　前橋市　西村　晃

寝転びて土筆の国の人となる　神戸市　大岩　正典

のどかさは河馬のあくびの喉の奥　横須賀市　浅井　耕作

列なして門を出でゆく落花かな　東京都　望月　清彦

正木ゆう子 選

ブルー・ライト・ヨコハマ春を惜しむかな　横浜市　杉山　太郎

【評】「ブルー・ライト・ヨコハマ」を歌ったいしだあゆみさんへの追悼句と思われるが、叙景句としても美しい。「惜しむ」が春にも故人にも掛かり、春と人が一体となったよう。

検眼の気球おそらく春の風　水戸市　大野太加し

【評】機械を覗くと気球が見える検査は、角膜の屈折度を測るのだそうだ。あの風景は確かによく晴れていて、春風が吹いていそうな場所。

春風やうしろにせまる園児の列　東京都　駒形　光子

【評】賑やかな声が後ろから近づいてくる。立ち止まって、子供たちを先に行かせてあげよう。通過にだいぶ時間がかかりそうな、可愛い行列。

春の星けもの道にも薄明り　東京都　本多　明子

母に背を押さるるに似て春疾風　千葉市　森田千代子

衣擦もはるか昔よ春の闇　鳥取県　表　いさお

霾や教壇に置く出席簿　京田辺市　加藤　草児

歩く人歩かない人日脚伸ぶ　奈良市　浦城　亮祐

豊かさを見詰め直して木の芽和え　秦野市　諸星　光恵

永き日のラップの端を見失ひ　佐野市　山崎　圭子

小澤實 選

卓袱台も七厘もある花筵　名古屋市　可知　豊親

【評】満開の桜の下の筵には、昔ながらの卓袱台が据えられ、七厘には炭火がおこっている。干物でも炙るのであろうか。なかなか充実した花見ができそうである。

外房の海女根性の長もぐり　匝瑳市　椎名　貴寿

【評】外房は房総半島の太平洋側である。そこで潜って漁をする海女は、やり通そうとする意志で、長い時間もぐっていられるという。

ISS北北西へ春夕焼　東京都　伊東　茂樹

【評】ISSは国際宇宙ステーション。春夕焼の空を見上げていたら、それが光りつつ北北西への方向へと流れていくのが目撃できた。

かまぼこにしょうゆをたらす花見かな　松山市　久保　栞

春愁やLPで聴く荒井由実　栃木県　あらゐひとし

ひらがなの手紙したため卒園す　土浦市　今泉　準一

我よりも髭濃くなりて卒業す　大阪府　池田　寿夫

ひらめきて小鮎走るや水の底　久喜市　深沢ふさ江

ビー玉で詰まる菓子罐風光る　東京都　山口　照男

隣席が先に匂ふや桜餅　伊勢市　藤田ゆきまち

枝しおり折

久保田登著『百花蜜』　2022年の日本歌人クラブ賞受賞者による第6歌集。＜百花の蜜のブレンド色濃くて匙に掬へばくらくらとせり＞

（いりの舎、2750円）

挿元みそ著『「詠む」からはじめる　ときめく短歌入門』　現代口語短歌の魅力を発信する著者が、気軽に短歌作りに挑戦するための指南本を刊行。＜安易な組み合わせに頼らない＞＜初心者におすすめの公募5選＞とアドバイスは具体的。

（扶桑社、1650円）

◆第24回俳句四季大賞＝中村和弘「荊棘」（ふらんす堂）

◆第13回俳句四季新人賞＝山海和紀「火は蛇」（30句）

◆第8回俳句四季新人奨励賞＝有瀬こうこ「母系」、田中木江「穴子」

◆第12回俳句四季特別賞＝森田純一郎「街道」（東京四季出版）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭